

From here.

ここからはじめよう。

学生支援GPによる 講演会ブックレット



名古屋学院大学 学生サポートセンター
(宗教部／キリスト教センター内)

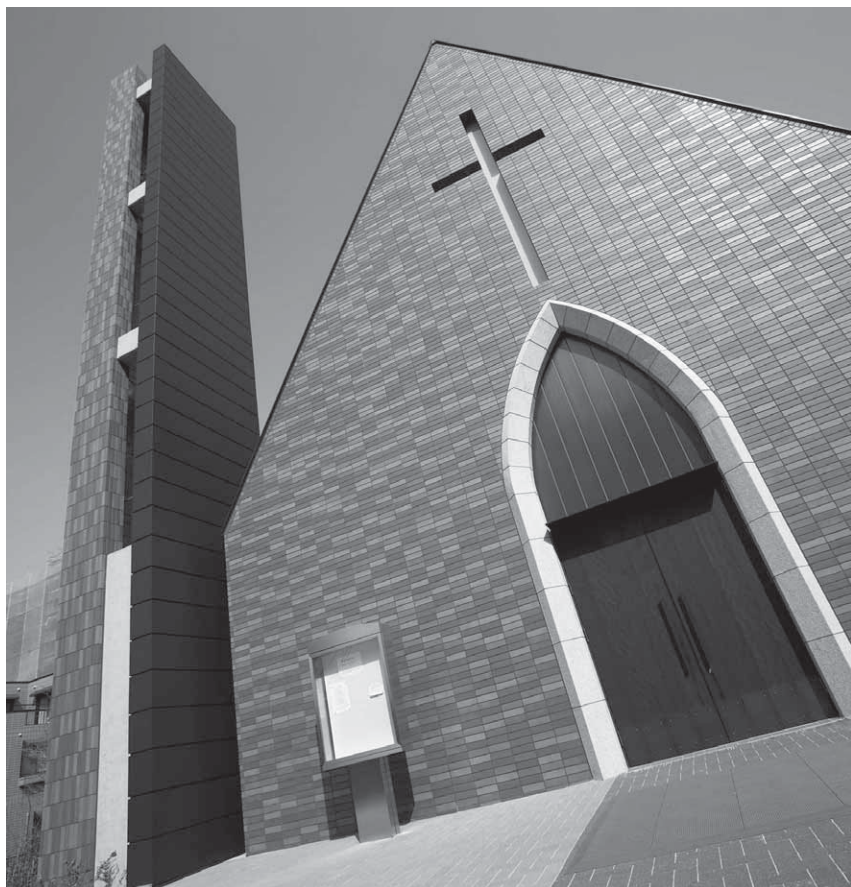
松井 るり子 先生

1957年生まれ。児童文化研究家。クリスチャンの家庭に育つ。

第52回産経児童出版文化賞受賞。著書に「ごたごた絵本箱」、「絵本いろいろお話いろいろ」、「七歳までは夢の中」、「私のまわりは美しい」、「恋をする子ども」、「あかんぼぐらし」、「可愛がられるために来た」以上、学陽書房。「絵本をとおって子どものなかへ」（童話館出版）、「絵本でほどいてゆく不思議」（平凡社）、翻訳絵本に「毛皮ひめ」、「わたしの庭のバラの花」、「クリスマスイヴのこと」、「かきの女王さま」以上、セーラー出版、「うまやのクリスマス」（童話館出版）、「うさぎのだいじなみつけもの」「ぼうし」「3びきのゆきぐま」以上、ほるぷ出版などがある。

人と人をつなぐ、ことば

松井 るり子



名古屋学院大学 学生サポートセンター
(宗教部／キリスト教センター内)

人と人をつなぐ、ことば

講師：松井 るり子

日時：2009年12月1日（火） 10:55～12:25

場所：白鳥学舎 チャペル

はじめに

松井るり子と申します。今日の講演タイトルは、福井智先生がつけてくださいました。「人と人をつなぐ、ことば」。なんていいタイトルだろうと思って、使わせて頂きました。ありがとうございます。

最初にお隣同士で、自己紹介をしてみましょう。私のお隣はどなたかな？ と見回して決めて下さい。まず私がやってみます。

「昨日見た美しいもの」は、茨城から来て久しぶりに見た、故郷岐阜の金華山です。「私が好きで集めているもの」は、実のなる木です。庭でいくつか育てているのですが、なかなか実らなくて、今年は柚子だけでした。でもいつかはきっと他の木にも実がつくだろうと願って、待っております。

それでは皆様、お始め下さい。

お隣の方が何を美しいと思い、何を好きな方か、わかりましたか？

さて、絵本は大人が読むものではないと思っていらっしゃる方も、多いかと思えます。私は今、短大で絵本を使って子どもを論ずる「児童文化」という授業を担当しています。学期の終わりに、学生さんが出してくれた感想に、「絵本より、大人の読む本の方が、ためになる」と思っていた。読んでみたら、絵本のすばらしさがわかって、びっくりした」というのがあって、うれしくなりました。絵本のようなものは、大人の読書にカウントしてはいけなないと考えていたのですね。

絵本に限らず、「ためになる」ことを期待せずに触れたものから、思いがけないことばが、ふっと頭の中に飛び込んできて、「ああ、こういうことか」と、何かに気付かされることは、しばしばあります。

子育ては人生最大の道楽

短大で宿題を出しました。「あなたのお母さんに、『今までで一番うれしかったこと』を尋ねて、書いてきて下さい」というものです。すると、お母さんたちが互いに電話で相談したんじゃないかと思うぐらい、おそろいの答えが返ってきました。

皆さんも考えてみて下さい。あなたのお母さんがこれまで生きてきた中で、うれしかったことを、たった一つ挙げるとしたら、何だと思えますか？ 今、ちょっと想像してください。

多分、お母さんから返ってくるのは、「あなたが生まれたこと」という答えだと思います。合っていましたか？ これを知った学生さんたちは、いつもは親子げんかばかりしているので、お母さんがそんなことを思っていたなんて、ちっとも知らなかったと、驚いていました。

でもお母さんにとっては当たり前のことです。あんまり当たり前すぎて、伝えずにいたのでしょう。子どもは、それを聞いたとき、とてもびっくりしました。お父さんに聞いてみても、同じような答えが戻ってまいります。

私も、今まで一番うれしかったことは、三人の子どもを授かり、育てたことです。私は専業主婦でした。毎日家において、子育ての合間に家事をして、夫は働いて家計を支えてくれました。夫はこれまで勉強してきたことを活かして仕事をし、社会の役にも立ち、業績を積み上げています。

私はごはんをつくっても食べたら終わり。洗濯しても、また明日洗濯しなくてははいけませんし、掃除してもまたすぐ汚れます。やってもやってもきりのない、何も積み上げていくものがない仕事しかできない自分を、なんだかつまらない人間のように思っていました。家事や子育てそのものは楽しかったのですけれど。

そんなくりかえしのある日、夫がこう言いました。「わかったぞ！ 人生の目的は仕事なんかじゃない。子どもを育てることだ」。

子育てという仕事に従事する、私という人間の価値を認めてもらったようで、うれしかったです。今の私は、人から認めてもらわなくても確信を持って、「子育ては人生で最大の道楽」と思っています。本当にいいものでした。

子どもをめぐる悲しい事件や困ったことがら、声高に報道されるせいでしょうか、私たちは子育てを難しく考えすぎて、あまり良いイメージが持てなくなっています。ふつうに楽しい子育ての平凡な喜びが、もっと語られるといいなと思っています。

たまたま来ただいじな子

今日は絵本を通じて皆さんと一緒に、子育てのことを考えていこうと思います。最初にご紹介するのは『100まんびきのねこ』（ワンダ・カアグ、福音館書店）という絵本です。

二人暮らしで寂しいおじいさんとおばあさんが、猫でも飼おうと思います。野越え山越え、おじいさんが歩いていくと、猫でいっぱい丘に出ました。どの猫も可愛くて、迷って迷って決められないので、100万匹全部を連れ帰ることにしました。猫たちが一口ずつ水を飲むと、池が干上がってしまうほど、一口ずつ草を食べると、丘が裸になるほどのたくさんの猫です。

家に着くとおばあさんが、こんなにたくさんの猫に食べさせるごはんはないと言いました。そこで、どの猫が一番可愛いのか、猫たちに決めさせることにしました。

猫たちは大げんかを始めて、互いに食べ合って、すっかりいなくなりましたが、草の陰に一匹だけみすぼらしい猫が残っていました。おじいさんとおばあさんが、その猫を洗って、ミルクを飲ませて、毎日だいに可愛がっていたら、やがて世界中で一番きれいな猫になりました。

これは私の小さい時から身近にあった絵本ですが、子どものころはあまり好きではありませんでした。猫たちが大げんかをするのが、怖くて嫌だったからです。

中学、高校になっても、やはりこの本を好きになれませんでした。自分が一番と主張した猫たちは、全滅しました。「おごれる者は久しからず」と、中学の平家物語の授業で習いました。「幼子のごとくあれ。天国は彼らのものなり」と、教会の日曜学校で習いました。この絵本でも、自分が一番と言った猫は滅び、言わなかった猫は生き延びました。

でも現実はどうかといいますと、我先に、がむしゃらに突き進まな

いと、落ちこぼされていきます。このお話のようなきれいごとの世界は、そらぞらしくて嫌だなという感想でした。

結婚して、生まれた子どもたちと一緒に図書館に行くようになると、子どもがこの絵本を気に入って何度も借りるので、買って読むことになりました。猫が「たくさんいる」ことを、子どもは気に入ったようでした。「波はいくつ来るの?」「お星さまはいくつあるの?」など、数の多いものに興味を抱いていたので、100万匹も猫がいる状態に魅せられたのでしょうか。

また一番上の娘が、小学校に入ってすぐ、「今日、かけっこしたらね、6番だったんだよ」と言いました。クラスで6番だったのかと思って「へえ、すごいね」とうっかり答えると、変な顔をして「6人ずつ走ったんだよ」と言うのです。しまった! と思ってあわててフォローした自分のことばは忘れましたが、その後の娘のことばが忘れられません。「わたし、一番じゃなくてもいい?」と言いました。

私はそれまで「一番じゃないとだめ」なんて言った覚えはないのですが、彼女は三人きょうだいの一番上のおねえちゃんとして、一番大きくて、一番よくお手伝いできて、一番頼りになる子としてやってきました。それが、同年齢集団に入ったとき、自分は一番でも何でもなかったことに気づいて、大丈夫かな? と思ったのでしょうか。

私は「もちろん、いいよ」と即答しましたが、それでは足りないような気がしました。ではどう伝えたらいいかと考えている時、たまたまこの絵本がありました。

私が昔考えたように、この猫は「謙虚さ」という美德を高く評価されて、それまでとは違う価値観の競争に、結局は勝ったおかげで、生き残ったのではありませんでした。いろんないきさつがあって、たまたま残った一匹が拾われました。おじいさんとおばあさんは、このたまたま授かった猫を、毎日だいじに可愛がったら、彼らにとって、世界中で一番きれいな猫になりました。

私たちが子どもを授かる時も、大勢の赤ちゃんの中から、一番丈夫そうで、一番かわいくて、一番優秀そうな子を、選んで取ってくるわけではありません。私どもにも、たまたま我が家に生まれてきた、かけこの遅い娘がいます。でもその子を一生懸命可愛がってきたから、私たちにとって大事なかわいい子で、そこはゆらぎません。皆さ

んも、同じように育てられたと思いますし、将来親になるときも、同じ気持ちを経験されると思います。

子どもにそんな説明はしませんが、私にとって『100まんびきのねこ』は、大事な絵本になりました。かつてこれを嫌いだと思っていたのも、それはそれで大切な道のりだったのでしょう。私がこの絵本の良さに気づいたのは、出会ってから30年近く経ってからでした。

肯定形のことばかけ

次にお読みするのは、『くんちゃんのはじめてのがっこう』（ドロシー・マリノ、ペンギン社）です。こぐまのくんちゃんが初めて学校に行く日、お母さんと連れだって森を抜けていきます。

くんちゃんは、途中でお友だちに会っておしゃべりしますが、お母さんは黙ってすたすたと歩いていくので、今日は学校に急ぐ日だったと気づいて、追いかけます。学校は上級生も一年生も一緒の教室でした。難しそうな授業に恐れをなすくんちゃんですが、先生は一年生にもわかることを尋ねて、できる課題を下さいました。くんちゃんは、学校と先生が大好きになります。

この物語には、否定的なもの言いをする大人が一人もいません。くんちゃんのお母さんも、学校の先生も、肯定的な言動によって、くんちゃんが自分からやりたくなることを引き出そうとしています。

学校生活が6歳くらいで始まって、大学を卒業するまでに、長い年月があります。その最初の日がこんなふうで、くんちゃんよかったねと、うらやましいような気持ちです。

いろんな言い方ができる場面で、私たちはつい、自分の感情だけが納得するような話し方をしてしまいます。それでこちらの気が済んでも、相手にとっては実のある内容は何も受け取れず、不快感だけが残ったりします。否定的なことばより肯定的なことばで、相手に気持ちを伝えることの大切さを、この絵本は教えてくれます。

何冊かあるくんちゃんシリーズから、次に『くんちゃんにとじ』（ドロシー・マリノ、ペンギン社）をご紹介します。雨が上がって空に虹が架かりました。友達のことりが、「虹の根元に、金の壺が埋まっている」と教えてくれます。くんちゃんはそれを取ってこようと、お鍋を持ってかけていきます。

「それはおとぎばなしですよ」「うちでは金はいらないよ」と両親は言いますが、くんちゃんの耳には入りません。虹が消えたあたりの大きな木に登ってみると、そこに「金」がありました。くんちゃんが持ち帰った金色のはちみつを、みんなで喜んで食べました。

抜けた乳歯を封筒に入れて枕の下に置いておくと、10円玉と取り替えてくれる「歯の妖精」や、クリスマスにプレゼントをくれるサンタクロースでしたら、大人たちがその代わりをしてやれます。でも、いつ、どこに架かるかわからない虹の根元を掘り返しても、出てくるのは「失望」だけです。

そこで、くんちゃんのがっかりしないように、大人が賢いことばかけをしてくれました。金は確かにいいものだけど、うちではいらないよ。虹の根元の金お壺は、おとぎばなしよ。そんな話をしたことりのことを、嘘つきだとは言いません。嘘とつもりは違います。人をだまして、自分が優位に立つための嘘ではなく、つもりのお話を、なるべく長く子どもと楽しめたらいいですね。

次は『くんちゃんのだいいりょこう』（ドロシー・マリノ、岩波書店）です。そろそろ冬ごもりの季節です。お友だちのことりが南の国に渡ると知って、ぼくも渡ってみたいと、くんちゃんは言いました。

羽もないのにどうするんだとか何とか言いたくなるころですが、お父さんはここで、「やらせてみなさい」と言ってくれます。くんちゃんは自分の思う方法でやってみます。違うと思ったところは、何回もやり直します。そのうち眠くなります。そのまま春まで眠りました。

夜はいつまでも起きていたいし、朝はいつまでも寝ていたいのは、大人も子どもも一緒ですが、大人と子どもの就寝時間は、ずれているので、「寝なさい」「眠くない」で、よくけんかになります。

また、子どもは眠くて泣くことがあります。眠いなら寝てしまえばいいのに、「なぜ、泣くんだろう？」と不思議でした。考えてみて、眠りが朝にちゃんと続いているのかどうか、不安だったのかなと思いました。

子どもの気持ちを汲むことは、なかなか容易ではありませんが、威圧的なことばで眠りを命ずるよりは、この物語のお父さんのように、おおらかに眠りに誘ってやれば、子どももきっとよい夢を見るでしょう。

‘甘やかし’と‘可愛がる’ことの区別がきちんとできた、この絵本の大人たちの語りかけや、ふるまいの気持ちの良さに、私たち大人も心地よくなりながら、参考にしていけると思います。

子どもは抱っこで絵本読み

大人も、人から絵本を読んでもらうと、気持ちよくて、眠くなりますね。子どもと読む時は、自分の膝の上に子どもを乗せ、絵本と自分の腕でぐるっと子どもを取り囲むように抱っこして読みます。すると子どもは、「おかあさんいす」あるいは「おとうさんいす」に腰掛けたように、お尻から背中まで好きな人にくっついたまま、頭の上から、好きな人の「いい声」が聞けます。

日常生活では、「だめよ!」とか「早くしなさい!」といった、叱ることばが多くなりがちですが、絵本の中には美しいことばがたくさんあります。大好きな人のいい声を聞きながら、目の前には物語の世界が、きれいな絵で広がっています。好きな人の体を通して、時には詩も聞こえてきます。

そういう時間を共有することは、子どもにとって、よい思い出として一生残ります。絵本の内容など、すっかり忘れてしまっても。

どこかで絵本の勉強会をしたときに、「あなたの一番好きな絵本を、一冊持って来てください」とお願いしたことがありました。その時に手ぶらで来た方が、こうおっしゃいました。

「私の一番好きな絵本は、何度も引越するうちになくなってしまい、思い出の中だけにあります。それは『ロッタちゃんのスパゲティ』という絵本で、色んな絵本を見てきた私が、今になって考えると、紙も粗末で、ちゃちなつくりで、絵本としての価値はあまりなかったと思います」。

その絵本は、ロッタちゃんが日曜日になると、お父さんにスパゲティを作ってもらって、一緒に食べるというお話です。彼女が小さいとき、毎週日曜のお昼に、お父さんがスパゲティを作って食べさせてくれた後、この絵本を膝の上で読んでくれたそうです。その思い出と結びついているから、その絵本が彼女にとっての一番だというお話でした。

絵の美しさやクオリティーももちろん大事ですが、それよりもお父

様の思い出を重んずる彼女から改めて、絵本そのものよりも、人との関わりが大事と学びました。

皆さんも将来、お子さんを膝の上で抱っこして絵本を読まれることをお勧めします。

大人の貫禄

次に『ペレのあたらしいふく』（ベスコフ、福音館書店）をご紹介します。自分の飼っている羊から刈り取った毛を、新しい服に仕上げるまでのお話です。ペレは羊毛を梳く、糸を紡ぐ、染める、織る、仕立てる仕事を、大人たちの力を借りて進めていきます。

大人たちには、自分の仕事の時間割が決まっていますので、ペレに頼まれた仕事をする間、ペレも自分にできる仕事を引き受け、喜んで働きます。こうして仕立てあがった服を着たペレは、「あたらしいふくをありがとう」と、自分の羊にお礼を言いました。

以前、この絵本を読んだら、子どもに「僕もペレとおんなじことして、お洋服作りたい」と言われて、困ったことがありました。私にできるのはせいぜい、ボタン付けか裾揚げぐらいです。

幼稚園で働く私の母が、子どもたちとお店屋さんごっこをしました。折り紙や、拾ってきたどんぐりで、売るものを作って、並べて、いよいよお店屋さんごっこが始まります。ところが、園児たちは「ごめんください」も「いらっしゃいませ」もなく、だまーって欲しいものをかごに入れ、自分で自動レジを通すポーズをとると、「ありがとう」もなくお店を出て、おしまい。近頃ではもう「お店屋さんごっこが成立しない」とわかったそうです。

それは子どもたちが悪いのではなくて、私たち大人がそういう世界を提供してしまったのです。だからこそ、物がどのようにつくられて、労力はどのように交換されているのかを、おはなしとして絵本で見えていくのは、意味のあることです。お買い物にしても、大型店でだんまりで済ませるばかりでなく、たまにはことばのやり取りのある、小さなお店に行きたいですね。

続きまして『おりこうなアニカ』（ベスコフ、福音館書店）から一場面をご紹介します。牧場での仕事を言いつかったアニカが、柵の鍵に手が届かなくて、ガタガタ触っていると、見知らぬおじいさんに

「子どものいたずらするものじゃない」と叱られました。

よその子どもを叱るのは、非常に難しいことです。でもそこを乗り越えて、まっすぐ注意したら、アニカもおじいさんが意地悪で言ったのではないことがわかり、きちんとわけを話すことができました。おじいさんは「ごめんごめん」と謝り、おわびのしるしにスプーンをくれました。

このように、よその子であっても愛情を持って叱る大人や、労働力の等価交換の場面が、ベスコフの絵本には描かれています。

牛乳が1リットル200円。卵一個が20円で売られているのを見て、生き物を相手に休みなく仕事している人に、これだけしか払わなくていいのかなあと、少しは思うのですが、同じ品質と安全性だと、つい安い方を買ってしまうのが現実です。労力の正当な交換について、こんな本で考えてみるのも、いいのではないのでしょうか。

次にご紹介するのは『ピッツァぼうや』（ウィリアム・スタイグ、セーラー出版）です。雨の日に外に遊びに行けなくて機嫌が悪く、ふてくされている子どもに対して、「そんなことでふくれるんじゃない！」と叱りつけると、ますます空気が険悪になってしまいます。

このお父さんは坊やに「そうだ、ピッツァ作りをしよう！」と提案します。坊やを生地に見立てた、つもりのピッツァごっこです。このぐらいの男の子は手をつなごうとすると嫌がったりして、少し難しくなっています。でもピッツァの「生地」としてこねられたり、「空中とばし」をされたりするのは、大好きです。

このお父さんはそのあたりをよく知っていて、おかあさんも一緒に、まじめくさって遊んでくれます。そうこうしているうちに、外の天気も回復し、坊やはそのまま「上機嫌で、外に遊びに出かけて」行きました。

このお父さんは、子どもに媚びているのではなく、気分転換の方法を、具体的に楽しく教えてくれています。人のご機嫌取りと、自分で機嫌を立て直すことの違いを考えていたとき、以前結婚式で聞いたスピーチを思い出しました。

— 私たちは幸せだから機嫌が良いのではありません。機嫌よくしていると、幸せの風がそよそよと吹いてきます —

ああ、本当にそうだなと、心から共感しました。「私が機嫌悪いの

は、貧乏だからしょうがないわよ」などと言っていたら、いつまでたっても幸せの風は吹いて来ません。不足や破れ目があるなりに、なんとか工夫して、機嫌よくしようと思って暮らしていれば、幸せになれるのだなと実感いたします。

作者がこの作品を書いたときは、なんと94歳でした。私ぐらいの年齢ですと、つい一生懸命になるあまり、子育てのあそこがだめ、ここがだめと脅してしまいます。この作者は、肯定的な働きかけの方法を、まさに大人の貫禄で、さりげなく肯定形で教えてくれます。

肯定形で受け止める力

続きまして『いつもだれかが』（ユッタ・パウアー、徳間書店）です。ここに出てくるおじいちゃんは、かつて戦争を経験しました。友がふいにいなくなる、隣で人が死ぬ、職がないなど、散々な目に遭ってきました。今もホスピスのベッドの上で、見舞ってくれた孫に語っています。

おじいちゃんが自分の人生を振り返って話すのは、「わしは何をしてもうまくいった」でした。これまでの苦楽をひっくるめた全てを、そういうふうに向きに受け止める力を授かったことこそが、このおじいちゃんの運が良かったところかもしれません。

1日24時間365日、子どもを完全に見守ることは、親にとって不可能です。何とか無事に過ごすことができたけれど、危なかったなあ！と思うことはよくありました。自分一人では守りきれないところを、守ってくれる何者かの存在を、初めて実感するのが子育てです。今もって、子どもにははらはらさせられどおしですが、大きな存在に助けられているなど感じることは、しばしばありました。

子守唄代わりに、よくこのうたを歌いました。ご一緒にどうぞ。

ーてんしさまー

おまもりください、やさしいてんし。いつもいつも、よるもひるも、あなたはわたしのそばにいる。mmmmm、おまもりください、おまもりください。

子どもたちに、寝かしつけがいらなくなってからも、心細くなったときや体調を崩したときに、この歌を「歌って」とせがんできました。子育ての間に、一番よく歌ったうたです。

子どもも誰かを可愛がりたい

次にご紹介するのは『くまのコールテンくん』（ドン・フリーマン、偕成社）です。リサがおもちゃ売り場で大好きになったくまのコールテンくんは、ズボンのつりひものボタンが取れていたので、おかあさんは「新品じゃないみたい」と言いました。

でもリサはその子が好きで、翌日お小遣いで買わせてもらえることになりました。家に連れ帰ると「ボタンがなくなってもあなたのこと大好きだけど、ズボンがずり落ちてくるのは気持ち悪いでしょ」と言って、ボタンをつけます。

おかあさんにとって、コールテンくんは「商品」でしたが、リサにとっては最初から「ともだち」でした。たいいてい私たちは「ボタンが取れていたら、みっともないからつけましょう」と、非難をこめたことばを使いがちです。人にはそれぞれ欠点がありますが、それで相手をとがめたり、嫌いになるぞと脅したりせずに、リサのように言ってもらえると、ちっとも嫌ではありません。そういうことばの使い方を教えてくれる絵本です。

この続編に、『コーちゃんのポケット』という作品があります。コーちゃんイコール、コールテンくんです。ポケットがないコーちゃんのズボンに、リサが糸針でポケットをつけます。

次にご紹介するのは、『はるになったら』（ガールズ・ウィリアムズ、徳間書店）です。小さいおねえちゃんには、弟が可愛くて仕方がありません。彼女は、いろいろな楽しい場面を思い浮かべて、あれしてあげる、これしてあげると約束をします。

自分がこれまで、大人たちに可愛がられてうれしかったその通りのことを、弟にもしてやりたいのでしよう。四季折々の美しい景色や好きなこと、楽しかった出来事などを挙げてゆきますが、一番最後のとおきのことは、「わたしがお母さんになったら、赤ちゃんを抱っこさせてあげる。こんなふうに」でした。

この子も「一番の幸せは、子どもを可愛がること」だと言っています。賛成です。私が勉強した児童学科で、「子どもには『可愛がって欲しい気持ち』の器があります」と習いました。その器が小さい子もいれば、大きい子もいます。子どもを可愛がって愛情をどんどん注いでいくと、いつかその水の溢れる時がきます。それが早い子も遅い

子もいますが、だれもがいつかはその器がいっぱいになって溢れて、「自分も誰かを可愛がりたい」という気持ちになり、これまで自分にたくさん注がれてきた愛情を、他の存在に向けるようになります。そのような、子どもの成長の瞬間を、うまくとらえている絵本です。

賢さを育てる

次にご紹介するのが『ゆうかなアイリーン』（ウイリアム・スタイグ、セーラー出版）という作品です。仕立て屋のお母さんがドレスを仕上げましたが、風邪で寝込んでしまいました。依頼主である奥さまのお屋敷にドレスを届けようと、一人娘のアイリーンが吹雪の中を出かけます。

途中、箱に入れたドレスが風に飛ばされてしまいました。空箱を抱えてとほとほと吹雪の中を歩くうち、あたりは暗くなり、足を取られて雪に埋もれました。

このまま死んでしまったらどうなるんだろうと、アイリーンは考えましたが、すぐに「そんなのやだ」と言って、もがいてもがいて、雪から這い出しました。私たちに必要な賢さとは、こういうことではないでしょうか。その後ドレスも見つかって、アイリーンはおつかいを果たしました。

奥様はおかあさんに、「アイリーンはすばらしいお子さんですよ」という手紙をこつづけてくれました。でも、それを一番よく知っていたのは、おかあさんだったと結ばれます。

日本人には「謙譲の美德」というものがあり、「いいお子さんですね」と褒められると「家ではそうでもないんですよ」などと、謙遜してしまう傾向にあります。それを子どもが見て「そうかな？ 僕悪いかな？ このおばちゃん好きだから、良く言って欲しかったのに」と思うかもしれません。このアイリーンが「いいお子さんですね」と褒められたとき、それを一番よく知っていたのがおかあさんだったので、アイリーンは勇敢に育つことができたと思います。

子どもの話をあちこちですておきますと、お母さま方からお手紙をいただきます。「私は子どもを可愛がりたいのに、ついぶってしまふ。蹴ってしまう。ひどいことばを投げつける。夜になると子どもの寝顔を見ながら泣いています。こんな私が、良いお母さんになる方法

はないでしょうか？」というのがありました。手紙の文字のインクが涙でにじんで、苦しそうでした。何か良いお答えがあればなあと、考えてみてもわかりません。友人に助言を求めたところ、彼女はこう言いました。

「人からもらえる手軽な方法はないのです。その本人が、もがいて、もがいて、自分で苦しんで這い上がるしかありません。」

一見冷たいように見えても、それが本当なのかもしれません。私の意見として「抱っこしてみてください」とだけ書いて送りました。理屈ではなく、抱っこして、いい子、いい子するだけで、子どもは心の落ち着きを取り戻します。その落ち着きを利用して肯定的に語りかけると、すっと伝わります。この時、親子の間には良循環が起こってきます。

些細なきっかけで、親子の関係は、善くも悪くも雪だるま式にふくらんでいきます。最初のところでひと工夫して、善い方向へちょっと転がせば、善い方向へとどんどん広がっていきます。その最初のきっかけとして、抱っこしてお互いが落ち着いてみると、自分が行くのはどっちかなと考えることができます。機嫌よく過ごすために、抱っこはなかなか良い方法だと思います。

次にご紹介するのは『かしこいビル』（ウイリアム・ニコルソン、ペンギン社）です。

メリーは、おばさんのうちでお泊まりすることになりました。いつも一緒のお人形のビルは、もちろん連れて行くつもりでしたが、うっかりおいてきぼりにされてしまいました。気づいたビルは、くたーんと二つ折りになって、涙の池ができるほど泣いています。でもビルは起き上がって、全速力で走って、途中の駅で、メリーの乗った汽車に追いつきました。「かしこいビル！」というわけです。

子どもの賢さをはかるのに、いろいろなものさしがあります。まだ小さいのに字が読めるとか、九九が言えるとかいったものさしは、はかりやすいですが、そんなことは、二十歳になれば誰でもできます。

子どもはたいてい一歳で歩き始めますが、10ヶ月や8ヶ月で歩く子どももいます。その子たちを集めて、何かスポーツの強化選手を育てるといった話もあってよさそうなのですが、ないところを見ると、歩き始めの遅い早い、運動能力には関係がないらしいことが分かります。

では、そういうことをそぎ落として、子どもを手放すまでに育みたい賢さは何でしょう。この絵本のビルのように、とっても悲しいことがあっても、自力で起き上がって、すべきことをすること、それからアイリーンのように、もがきながら、危機から這い出す勇気だと思います。

おわりに

絵本の中には、そういうだいじなことが、きちんと書かれているものがあります。大体32ページという小さな舞台の上で、簡潔な文章で、完結した一つの世界を見せてくれます。

分厚い単行本で長い小説を読むのも楽しいですが、自分の気持ちに響いてくるものを探すのは、結構大変です。絵本でしたら、短時間で全体を見通せますから、そのときの自分に呼応する絵本を何冊かセレクトして、ご自分のために活用するのも、いいかと思います。今日ご紹介した何冊かの絵本の中に、これは私の物語だなという作品を、一つでも見つけていただけたら嬉しいです。

絵本を選ぶときのポイントは、今まで自分が培ってきた審美眼を駆使して、「美しいことば」と「美しい絵」を見極めることです。子どもの好きそうなキャラクターがのっているからといった視点で選んだ絵本を、親自身が興味なく、忍耐力で読み聞かせても、「絵本を読むというのは、何か我慢が必要らしい」「この人は、私のために我慢をしてくれる偉い人」ということは伝わります。でも「絵本はつまらないもの」という印象も残ります。

逆に、大人自身が好きで選んだ絵本を、子どもにその楽しさを分ける気持ちで読んだ時、大きくなって絵本の内容など忘れてしまっても、「読んでくれた人が、やたらうれしそうだったから、絵本はどうやらいものらしいよ」ということが残ります。それこそが、子どもに伝えたいことではないでしょうか。

大人の審美眼を使って、美しいと思える絵本を厳選して、絵本の本棚をつくっておくと、そこからどの絵本を持ってこられても、100回繰り返し返させられても、気持ちよく読むことができます。

人と人をつなぐ、ことば。大人と子どもをつなぐ優しい肯定的なことば、大人と大人をつなぐ美しいことば。今日お読みした絵本の中

で、もしあなたが「好き」と思えた本があったら、その作者の他の作品を図書館で探してみてください。同じテーマの別の絵本もさがして下さい。そうやって芋づる式に「好き」の世界を広げていただければと思います。そうした中で、みなさんと、みなさんの周りの人をつなぐことばが、豊かに育まれますようにと願っています。

あ と が き

学生支援 GP（文部科学省新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム）の一環といたしまして、学生サポートセンター（キリスト教センター内）ではこれまで様々な活動を、学生さんとともに展開してまいりました。そのうち、キリスト教主義大学としてのスピリチュアルケアの観点から実施しました講演会の内容を、今年も冊子にまとめました。

これを多くの学生の皆さんが読み、今を生きる上での大事なヒントを何か感じていただければと思います。

2009 年度 学生支援 GP による講演会ブックレット

2010 年 3 月 1 日発行

編集・発行 名古屋学院大学 学生サポートセンター

〒 456-8612

名古屋市熱田区熱田西町 1 番 25 号

TEL 052-678-4096

印 刷 東洋印刷工業株式会社



"From here" —ここからはじめよう。

名古屋学院大学